

I ロシア連邦極東国立農業大学との共同研究が始まる

富山大学極東地域研究センターとロシア連邦アムール州の州都ブラゴベシチェンスクに所在する極東国立農業大学は、2011年7月15日付けで、学術交流に関する協定に調印しました。環境研究班は、アムール州北部に位置しているゼイスキー自然保護区内の山岳環境を対象に、気候変動と高山植生の変化や森林火災との関係を調べる共同研究を開始しました。

地球温暖化の影響による生態系の変化が全世界で懸念されていますが、その中で山岳上部に位置している高山生態系は、都市化の影響を無視でき、広域に生じている気候変動の影響を感受できる場所として適しています。登山道も人工物もほとんど見られないロシアの山岳地帯、そして樹木の伐採等の人間活動が一切禁止されている自然保護区は、その中でも最も適した場所です。我々の研究グループは、ゼイスキー自然保護局の協力のもと、同自然保護区に位置している山々の山頂に、2つの長期観察調査地を設定しました。ここでは、本年9月6日から12日まで現地を訪れた合同調査の様子を紹介します。

ロシア側参加者4名、日本側参加者3名、総勢7名の調査隊は、発電のためゼーヤ川を堰止めて出来た巨大人造湖・ゼーヤ湖を2台のモーターボートで1時間程上流部に移動しました(写真1)。



写真1. 登山開始地点に接岸し荷を降ろす調査隊(9月7日)。

ザックを背負いスミルノフスキー沢沿いに上流部に向かい、その後斜面を登攀しました。途中、2ヶ月前に起こった森林火災跡地を通り抜けました。落雷により生じたとされる森林火災が奥山でも起こっていることを肌で感じ、今後の遷移過程・回復過程に興味を抱かせました。途中昼食をとり、再び獣道を進み、テント設営場所に到着した時は現地時間で午後8時。ロシアの方々素早く火を焚き、星空の下遅い夕食を済ませ、寝袋に潜り込み就寝しているとテントがカサカサと音を立てています。台風12号の影響か、未明から雪となりました(写真2)。これでは山頂の植物は雪に埋まってしまい調査は難航しそうです。降雪が止んだ頃、5名の調査員が山頂に向かいました。山頂の標高は約1,100m、風衝的な立地に高山性植物群落が成立しており、気温計・地温計等



写真2. 青いテントの周りに積もる雪(9月8日)。

のロガーの設置、落葉等の量を把握するためのリタートラップを設置しました。テントで更に1泊後下山、待ち合わせたボートに1時間遅れで乗りゼーヤの町に戻ることができました。

翌日は、昨年視察に訪れたことのある第2の調査地へ向かいます。エラキングラ川の上流部に位置する標高約1,400mの山(写真3)、山頂に向かう途中標高約1,300mのエゾマツ林内に小屋があります。この小屋・イズブシュカに1泊し、山頂での調査を無事に終えることができました。

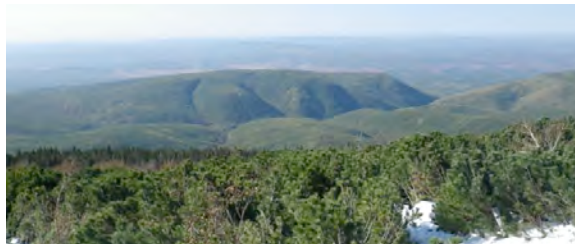


写真3. 山頂のハイマツ群落(手前)と眼下に広がるカラマツのタイガ林(9月11日)。

今回の調査は、高山生態系の変化を長期的に観察記録するための第一歩。研究の成果はこれからです。しかし、今回の調査で得られた大きな成果は、我々を迎えてくれたロシア人研究者の心の温かさに触れられたこと。ガイド役となってくれたビクターさんと妻のエレナさんを始め、極東農業大学のユーリさんとセミヨンさん、また日本隊として参加下さった当センターの串田圭司先生、理学部四年生の立島健さん、厳しい野外調査を終えることができたのは日露調査隊のチームワークの御蔭(写真4)。皆様に心より感謝申し上げます。ボリショイ・スパシーバ！(文責：和田)



写真4. 日露調査隊. 左からセミヨン, ユーリ, エレナ, ビクター, 串田, 筆者, 立島(敬称省略)(9月10日)。

なお本調査の一部は、富山第一銀行奨学財団からの研究助成並びに高低差4,000富山環境プロジェクトの支援により実施しました。関係者の方々に深くお礼申し上げます。

II 極東地域研究センターとスロヴァキア科学アカデミーとの交流

マルチナ ルビオヴァ (Martina LUBYOVA)
スロヴァキア科学アカデミー予測研究所上級研究員・国際交流基金知的交流フェロー

私と富山大学とのおつきあいは、もう 10 年にもなります。私が国際労働機関 (ILO) モスクワ・オフィスに勤務していたとき、富山大学の堀江典生教授がよくオフィスを訪れ、ロシアの労働市場や移民研究に関する多くの意見交換を行いました。その後、私はロシアを離れ、母国スロヴァキア共和国の科学アカデミーに復帰しましたが、堀江教授との意見交換や共同研究を継続するために、富山大学極東地域研究センターに招いていただきました。

私は、2011 年夏に一ヶ月間富山に滞在しました。私の滞在は、国際交流基金の知的交流フェローシップの支援によるものです。このプログラムは、日本と外国の研究者の協力を支援するもので、スロヴァキアの日本大使館は、私の日本滞在の準備にとっても献身的に協力してくださいました。富山大学と極東地域研究センターからは、素晴らしい研究施設と研究環境を提供していただきました。ここに記して感謝したいと思います。

私たちの共同研究は、ロシアおよび CIS 諸国の労働市場政策に関する諸問題、特に、若年層の失業問題や新卒者就職問題に焦点をあてています。制度的な観点で言えば、日本の新卒者就職の諸制度は、非常にユニークです。日本の新卒者は最初の就職において多くの制度的支援を受ける環境にあります。ロシアや中央アジア、それに私の母国を含む東欧諸国においては、そうした制度的支援はありません。こうした国々では、新卒者以外にも開かれた労働市場において新卒者が仕事を求めて競争しています。また、新卒者は大学や卒業生の支援を受けることなく、独自に職探しをしています。近年の経済危機のせいで、誰にとっても就職を期待できない状況ですが、特に若年層にとってそれは深刻です。そのため、堀江教授と私は、新卒者を支える諸制度に関する研究に焦点をあてることを決め、若年層の就職に最善の結果を生み出せる就職のあり方を、日本、ロシア、そしてアジア諸国のデータを利用して分析しようと考えたのです。

また、ほかに、アジアの約 10 カ国における失業者の就職支援に関する労働市場制度に着目しようと考えています。というのも、多くの CIS 諸国ではそうした就職支援はかなり遅れており、ほとんどの失業者はそうしたサービスを受けることができないでいます。母国で仕事を得ることができないために、家族を養うために人々は外国に出稼ぎに行くことを強いられています。一部の中央アジアの国々では、労働人口の約半数が海外に出稼ぎにでているという状況です。CIS 諸国の人々は、日本語は話せないし、他のアジア諸国の移民達に比べ、技能レベルも低いとされています。そのため、多くの CIS 諸国の人々が出稼ぎに向かう先はロシアとなっていますが、国内労働市場に改善がなければ、将来的に彼らは日本の労働市場を目指すことになるかもしれません。一方、日本社会は、人口減少と高齢化を経験しており、そのため、外国人労働者が

日本の労働市場を目指すニッチが生まれていると言えます。私の研究は、きっと日本の労働市場政策にとっても、意義のある結論を導き出せるものであると考えています。

富山では研究だけに勤しんでいたわけではありません。私は今回家族をつれて富山にやってきましたが、私の家族は富山県の様々な魅力を果敢に探索したようです。私も週末には彼らに加わり、富山の自然のすばらしさを堪能しました。立山・雄山登山 (写真 5) は、そのなかでも最大の成果としてあげることができるでしょう。

富山市は、河川、公園、そして山々といった自然が都市生活とうまく結びつき、自然と隣り合わせでとても居心地のよい街でした。でも、私たちが富山に見いだした最も素晴らしい魅力と資産は、そこに住む人々でした。富山大学の同僚たちだけでなく、街で出会った人々も、私たちを温かくもてなし、親切にしてくださいました。こうした温かいもてなしや親切を私は他で出会ったことがありません。富山の若い人たちにも彼らにとって当たり前前の環境であるそうした宝物を誇りに思ってもらいたいと思います。

私の富山での滞在は終わりましたが、極東地域研究センターと今後も共同事業、共同研究を続けていくこととなります。将来、再び富山を訪れることができると思います。そしてスロヴァキアで欧州研究やその他の共同研究において日本の同僚たちを歓迎できる日を楽しみにしています。

ARIGATO DOMO! またお会いしましょう。

(訳: 堀江典生)



写真 5. マルチナさん一家 (雄山山頂にて)。

追記) 猛暑の中、毎日、研究室と富山大学正門の Café AZAMI で研究に励んでおられた姿が印象的でした。ちょうど富山市内を流れるいたち川で恒例の灯籠流しが行われ、その幻想的な風景にマルチナさんとそのご家族も感動されていました。そのとき、地域住民の方々から温かい歓迎を受け、軒先でアイスコーヒーなどを頂いたことなど、富山市民のみなさんのもてなしが、遠いスロヴァキアからの異邦人のハートをしっかり射抜いたようです。立山登山での小学生たちの礼儀正しい挨拶や市内で道に迷ったときの市民のみなさんの優しい対応など、国際学術交流は大学においてのみ完成するのではなく、市民のみなさんのご支援やお心遣いが大きな力となることを感じました。滞在中、富山大学経済学部教員の皆様、事務局の皆様、市民の皆様からの温かい歓迎に受入責任者として記して感謝申し上げます。(堀江典生)